

芸術・美術・アート？子供の頃を思い出してみよう！

美術を素直に感じることで「人」の可能性が見えてくる」

東西を問わず、近代文明を謳歌している国々では、学校教育の一環として音楽や美術を学びます。いわゆる情操教育として、音楽史や美術史に沿い、作品の時代背景と作品の傾向などを教科書から学び、先生の指導に基づき「自ら表現する」ことも学びます。日本では歴史的に知識としての理解が重視され、さらに“皆”のなかでは「上手に演奏できた、上手に描けた」という観点で子供を評価する、全体評価の傾向が強いと思います。

一方、個々の実力を正しく評価する“技量と精度（質）”という尺度は、育成の状態を知るために切り離すことができない重要事項です。さらに個人が自分自身の能力や状況を客観的に、そして正確に把握することは単なる個々人の視点から、文化・文明という視点で広く社会に目を向けさせ限りなく思惟を深める可能性を秘めています。

唐突に感じるかも知れませんが美術を広義に捉えると、「個々の文化の源泉としての“アイデンティティ”が、創作者と表現されるすべての事物の“礎”となり、美術が成されている」、と考えるべきだと思います。つまり創作者が育った環境、生まれた地域文化が創作の基盤にあり、言い換えれば“人”の下意識にアイデンティティが存在しているから独創的な創造が生まれるのです。誰にでもある郷土愛や愛国心が創作に大きな影響を与えている事実は、広く理解されていると思います。

翻って、現実社会では先に触れた「誰々よりも上手にできた？」というこの評価傾向が、学校だけではなく企業などの人事評価にも存在しています。多くの場合、私たちは事象の表層しか見ていないのではないのでしょうか。

いわゆる「失敗から学ぶ」、米国の経営（者）の考え方が参考になります。グローバル思考が必須と言われている昨今、基礎条件として自身の存在と、その長所短所を知る仕組みが必要であるということです。つまり、上位の者が無計画に先の“表層の優劣”を提示するということは、その子供やその作品等に秘められた本当の価値、その影響力や可能性、その潜在力を理解していない、認めていない、ということです。

人の成長において最も大切なことは、上手にできなかった子供達に対するケアが、きちんと成されている（プログラムされている）、ということではないのでしょうか。放任という考え方がありますが「意図した放任でない限り」現在の学校教育の在り方が、成人してもなお「自ら能動的に作品を理解する（作品を受け入れるか否かを判断する）」ことができず、なんとなく受け

入れているということの遠因だと考えています。

『失敗の本質—日本軍の組織的研究』（共著：戸部良一、寺本義也、鎌田伸一、杉之尾孝夫、村井友秀、野中郁次郎）という本があります。これは、第二次世界大戦の日本軍の戦い、その戦術的失策を検証するという趣旨で編纂されたものです。ガダルカナル戦やミッドウェー海戦の分析を通して見えてくる米軍と日本軍の違いは、「(失敗から学ぶ如何に関わらず) 事実を冷静に分析し次につなげる判断ができるか、できないか」ということです。

例えば、米軍が劣勢だった戦いを経て学んだものは、「二度同じ過ちを犯さない、そのために、戦いのグランドデザインをしっかりと作り、武器等の改良と継続的な兵士教育を実践する」等々という、実に当たり前のことでした。それに比べ日本軍は、縦社会における“権威の誤用”と過去の成功体験に乗じた思い上がった戦術、さらに「兵士をモノとして活用した、組織幹部の個人的な“我欲”による迷走」が敗因の根でした。残念ながら、現在の日本社会にもなお旧日本軍の影、その根を見出すことができます。

ここで申し上げたいことは“最悪の状態からでも良い結果に繋げる方法はあるのだ”ということとを継続的に子供達に示さなければならない、ということです。

子供が、美術に触れる場は色々なところにあります。関連して、子供が事物を“深く考える”ということは子供の日常における環境作りが重要で、実は周りの大人達の思慮深さに相似していると思います。

2002年頃、知人の娘さんが、フランスの高校に留学していました。ある日、知人が私に問い掛けました。「娘が使っているフランスの国語の教科書に、思いもよらないモノが載っていてびっくりした、日本では有り得ないモノだよ、なんだと思う」しばらく思案しましたが、結局分かりませんでした。その答えは、“各ページの余白に国語とは関係ないフランスの伝統的な絵画”が掲載されていた”ということでした。

知人はコーポレートコミュニケーションにおける、CI デザインの専門家で芸術を広く楽しむ人でした。彼は、フランスの自国芸術に対する誇りと自信、また教育に対する姿勢を垣間見て、文化に対する懐の広さを改めて実感したと語っていました。その教科書だけが特別なのか、フランスの他の教科書にも何か工夫がされているのか、詳細は分かりませんが、その時、私のフランスに対する見方が変わったのは言うまでもありません。先に触れたアイデンティティについて、私達日本人が深く議論すべき事例ではないでしょうか。

掲載されているフランス名画に対して、授業そっちのけで“いたずら書き”をする子供も少なく

ないでしょう。でもページをめくると必ず出現する名画は、子供たちの記憶深くに、自然に刷り込まれていくことでしょう。サブミナル効果のような影響もあるかもしれませんが、ヴィジュアル的にも心憎い教科書編集であり演出であると言わざるを得ません。日本の教科書も、少しは見習ってほしい編纂の考え方だと思います。

フランスの文化省が優れているから、また日本の文部科学省などにおける政策の質が劣るから、という意見を聞くことがあります。確かに否定できない部分もありますが、教育者側の、理念の質の向上がもっとも重要だと私は考えます。

教育に対する姿勢という点で、以前私が海外の美術館等（アメリカ、イギリス、ドイツなど）を訪れたときに見かけた、印象的なシーンがあります。共通しているのは、年齢が小学生や中学生くらいの十数人程度の子供たちが、ノートとボールペンなどを手にし、先生と語り合いながら展示されている作品を真剣に、そして楽しそうに鑑賞しているシーンです。皆さんも「そういうえば」、という経験が有ると思います。日本では話をしながら鑑賞することは暗黙裡に敬遠されていますが、静かなトーンで語り合うことはよいのではないのでしょうか。彼らはその点をわきまえていました。

また、欧米の美術館等にその館専属の説明員が、配されていることがあります。専門教育を受けたボランティアや、地域の有志の方々が説明委員となる場合も多くあるようです。日本でも同様の説明員の方が増えてきました。ただ残念ながら、構図の説明に留まっているような印象を受ける場合も少なくありません。説明する側の「姿勢」も一考したいところです。説明する側の知識の深さを問うのではありませんが、「探求と向上（イメージの拡張）」の視点で「この作品は実験的な手法が試されており、その技法を習得する過程で作家が得たものは・・・」、「この作品には、作家の原体験が秘められている・・・」こんな話から、子供達だけに限らず説明を受ける人とのコミュニケーションが活発になり、人々は自ら、ある作品からまったく違った“何か”を知ることになるのです。

組織教育において「シングルループとダブルループ」という考え方があります（1978年に、アメリカの組織心理学者クリス・アージェリスとドナルド・ショーンが提唱した『組織学習』の概念）。シングルループ学習とは、すでに備わっている考え方や行動の枠組みにしたがい問題解決を図っていくことであり、ダブルループ学習は既存の枠組みを捨てて、新しい考え方や行動を取り込むことです。通常の組織は、シングルループ学習だけで環境に適応しながら継続的に存続することは難しく。存続するためには、過去の成功体験にこだわらず固定観念を捨て、外部からの新しい知識や枠組みを取り入れ（ダブルループ学習し）、再度シングルループ学習の手

法に基づき反復し、組織を強化する。このサイクルを繰り返し継続できる組織だけが、競争優位を保ち続けることができるという考えです。日本における組織論の重鎮、野中郁次郎氏もこの学習手法の重要性に触れられています。

「シングルループとダブルループ」の考え方は、学習における個々人の取組み方の“その指針になる”と考えます。前述した、“フランスの教科書”や“美術館における先生と生徒の対話”から見えてくることは、今あるものを本当に最大限、かつ有効に使っているのか？慣習やルールに縛られ、自然体で事物を見て考えられていないのではないか？言い換えれば、相手（問題）と自身（課題）を俯瞰した状態で見つめることが必用であり、さらに、熟慮の上で想起した考え等を具体的に迅速に実行することが、人間成長の重要なファクターだと言えるのではないのでしょうか。

「考える」という視点から、作品理解の姿勢に少し触れたいと思います。美術館などで初めて対面する芸術作品が何を意味しているのか等々、誰でも疑問に思うことです。作品理解の補助という点では、国内外の大きな美術館で貸し出している、イヤホンガイドがあります。

作品の概要や画家の意図をその場で知ることができ、良いツールだと思います。それぞれの展示作品の前に立つと速やかに個々の説明を聞くことができますから、皆さんもよく活用されていると思います。でも、これでは聞こえてくる説明以上のことを得ることはできません。先の説明員の紋切り型説明を聞くことと同じで、受動的状態のままにしていることは、個人的に大変もったいない時間をすごしていると感じます。自ら観察し、その観察を基に想像する楽しみを放棄しているからです。展示作品に纏わる歴史的な事象等は、カタログや図録で調べることができますからオリジナル作品の前では、その作品の「自分だけの解釈や秘密の発見を楽しむ」ことも自由なのです。

これに関連して私自身の個人的な体験ですが、イヤホンガイドを利用すると作品と私の間に目に見えないシールドのようなモノが発生し、上の空で作品鑑賞しているような状態になり、作品の印象さえも残らない場合が多いのです。

私は、イヤホンガイドを否定するわけではありません。あくまでも作品と対峙し、その作品との会話を楽しむことをお勧めしているのです。ある作品に対する研究者の主張（コメント）が、歴史的事実として正しく解釈されているとは限りません。第三者の解釈は時代と場所、性別でも違ってくるものです。イヤホンガイドはあくまでも補助として活用する、そんな鑑賞日をつくってはいかがでしょう。